

群 教 セ	G05 - 03
	平25.251集
	小・音楽

伝統音楽に親しみ、思いや意図をもって 表現していく児童の育成

— 題材構成を工夫したおはやしづくりの活動を通して —

特別研修員 飯塚 弘美

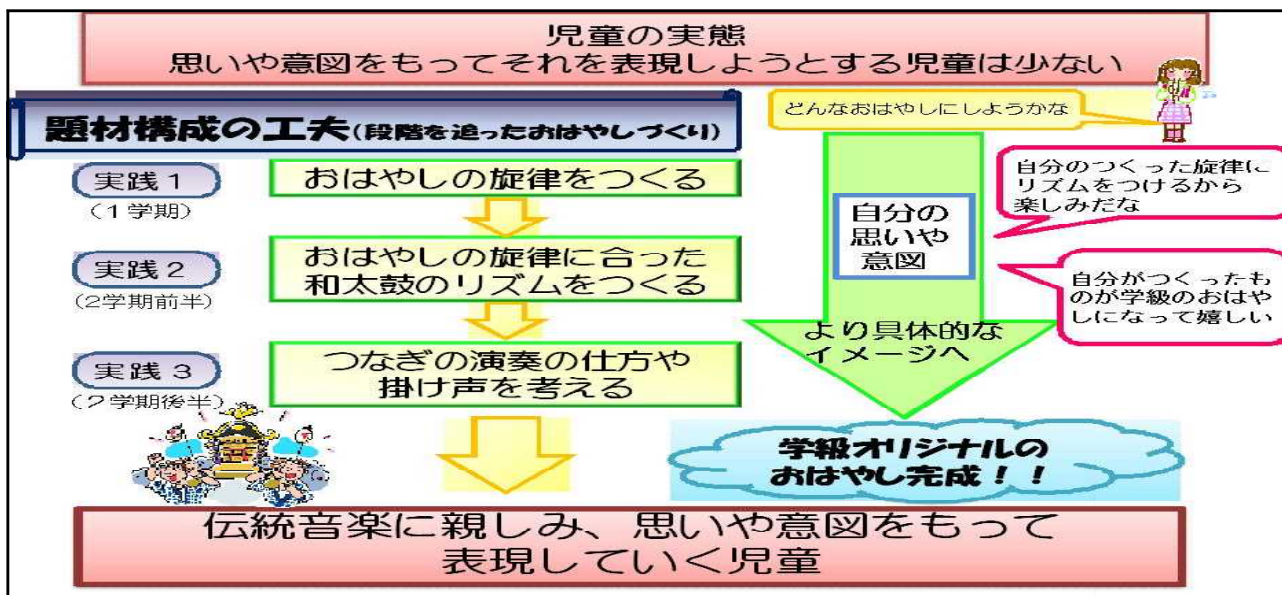
I 主題設定の理由

学習指導要領では、「我が国の音楽文化に愛着をもつこと」が改善の基本方針として掲げられている。「はばたく群馬の指導プラン」では「音楽の要素を手がかりに音楽づくりや創作をすること」が課題として挙げられており、「思いや意図をもった音楽づくり」ができるような能力の向上が求められている。本校でも、歌唱や器楽に対して意欲的に取り組む児童が多いが、「こういうふう演奏したい」という自分の思いや意図をもってそれを表現しようとする児童は少ない。

そこで、音楽づくりの学習において、伝統音楽の特徴（陽音階、リズム、掛け声）を生かし、自分の思いや意図を基におはやしづくりを行うこととした。「旋律づくり（リズム→音探し→記譜）」、「リズムパートづくり（自分でつくった旋律に合う和太鼓のリズム）」、「学級のおはやしづくり（旋律・リズム・掛け声・つなぎを合わせる活動）」と年間を通して段階を追った題材構成の工夫をすることによって、無理なくおはやしをつくることができる。このような考えから、上記の通り主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手だて

「おはやしや民ように親しもう1」（第4学年・1学期）において、以下の点に留意しておはやしの旋律づくりを行った。

— 実践1における研究上の手だて —

- 「旋律づくり（リズム→音探し→記譜）」、「リズムパートづくり（自分でつくった旋律に合う和太鼓のリズム）」、「学級のおはやしづくり（旋律・リズム・掛け声・つなぎを合わせる活動）」と年間を通して段階を追った題材構成の工夫をする。
- ・ 「旋律づくりの四つのポイント」を提示することによって、音楽の要素や仕組みに着目しながら、思いや意図をおはやしの旋律に表現できるようにする（音符カードの使用）。

年間を通して段階を追った題材構成を工夫し、最初に見通しを示したことによって、児童はおはやしづくりの過程を理解し、「学級オリジナルのおはやしを完成させる」という最終目標に向けて意欲的に取り組むことができた。音符カードを活用した旋律のリズムづくりでは、「旋律づくりの四つのポイント」を参考に、音楽の要素や仕組みに着目しながら机を叩いたりカードを並べたりしていた。音符カードの活用は、1小節に4拍分が正しく入っているか視覚的にも確認することができ、有効であった。しかし、中には、何となく音符カードを並べただけ、何となく陽音階の音を当てはめただけという様子が見られ、自分の思いや意図を表現するということまでは至らない児童もいた。

そこで、「おはやしや民ように親しもう2」（第4学年・2学期）では、以下の点に留意しておはやしのリズムパートづくり（自分でつくった旋律に合う和太鼓のリズム）を行った。

実践2における研究上の手だて

- 「旋律づくり（リズム→音探し→記譜）」、「リズムパートづくり（自分でつくった旋律に合う和太鼓のリズム）」、「学級のおはやしづくり（旋律・リズム・掛け声・つなぎを合わせる活動）」と年間を通して段階を追った題材構成の工夫をする。
- ・ 「リズムパートづくりの四つのポイント」を提示することによって、音楽の要素や仕組みに着目しながら、思いや意図をリズムで表現できるようにする（音符カードの使用）。

実践1の考察を踏まえ、「リズムパートづくりの四つのポイント」を掲示することによって、音楽の要素や仕組みに着目しながら、思いや意図を表現できるようにした。その結果、大太鼓のリズムパートをつくる際には、ただ何となく音符カードを並べるのではなく、机を叩いたり手拍子をしたり口唱歌したりしながら試行錯誤を重ね、自分のイメージに合った大太鼓のリズムパートをつくることができた。児童が作ったおはやしの旋律をCDに録音し、大太鼓のリズムパートと合わせて演奏することによって、児童は実践1での活動や自分の季節のイメージ及び、「こんなおはやしをつくりたい」という思いや意図を想起することができ、おはやしづくりへの意欲が持続した。

III 研究のまとめ

1 成果

- 児童が音楽の要素や仕組みに着目しながら、無理なくおはやしづくりをするために、「旋律づくり」、「リズムパートづくり」、「学級のおはやしづくり」と年間を通して段階を追った題材構成を工夫したことは有効であった。
- 段階を追った活動を通して、児童が最初にもった思いや意図がより深まり、自分のイメージに合った旋律やリズムパート、掛け声をつくることができた。
- 旋律、リズムパート、掛け声、つなぎを合わせて学級オリジナルのおはやしをつくる過程において、児童はどのようなおはやしに仕上がるのか楽しみにしながら意欲的に取り組んだ。また、完成したおはやしの発表の場を設定することによって、児童に達成感を味わわせることができた。

2 課題

- 児童は、自分の思いや意図をもって旋律づくりができたが、それを演奏につなげることは容易ではなかった。今後は、演奏技能の向上を図る常時活動を工夫する必要がある。
- 大太鼓のリズムパートづくりでは、自分のつくったリズムを叩くのが精一杯で、旋律に合っているか、旋律を邪魔していないかを確認するまでには至らない児童もいた。

3 提言

- 学級オリジナルのおはやしづくりを行う活動では、一人4小節の短い旋律でも、11人の作品をつなげると44小節（つなぎを合わせると60小節）の大曲になる。その際に、「旋律づくり」、「リズムパートづくり」、「学級のおはやしづくり」というように、年間を通して段階を追った題材構成の工夫をすると、児童は無理なく楽しみながらおはやしづくりをすることができる。

IV 実践及び改善の実際

実践 1

1 題材名 「おはやしや民ように親しもう 1」(第4学年・1学期)

2 本題材及び本時について

本題材は、伝統音楽の特徴を感じ取り、思いや意図をもっておはやしの旋律をつくることのできるようにするものである。本時は、全3時間計画の第2時にあたり、祭りばやしに親しみながら、リズムや構成音などの特徴を感じ取った上で、思いや意図をもって陽音階のまとまりのある4小節のふしをつくるのがねらいとなる。自分の思いや意図を旋律に表すことができるように、本時の研究上の手だてを次のように構想し具体化した。

3 授業の実際

導入において、当番の児童が音符カードを並べそれを全員でリズム打ちしたり、ソーラン節を歌って掛け声や発声など伝統音楽の特徴を確認したりすることによって旋律づくりへの意欲を高めた。

次に、前時に話し合った自分がつくりたいおはやしの季節とそのイメージを確認し、以下の課題を提示した。

【課題】 4小節のおはやしをつくろう

児童の季節のイメージ

〈春〉桜が咲くように豊かな感じ・春の暖かさ・生命の始まり→伸ばす音符を使ってゆっくりに
〈夏〉明るく・元気に・盛り上がるように→はねる音符を使って・はねるリズムにのって楽しく
〈秋〉葉っぱがひらひらと落ちるように優しく→葉っぱが高いところから低いところへ落ちるよ
うに、音も高い音から低い音へ

〈冬〉雪が降っている感じに→四分音符を使ってゆっくりに

冬でも寒さに負けず元気よく→最初は誰でも寒いから低い音から始まって、体を動かして
だんだん暖かくなるところはだんだん高い音へ

おはやしの旋律づくりにあたり、次の「旋律づくりの四つのポイント」を示した(図1)。

- ①リズム→おはやしの特徴的なリズム(リズム譜の掲示)
- ②音階→陽音階(レミソラシ)
- ③終始音→「続く感じ」・「終わる感じ」
- ④反復→リズムや旋律の繰り返し

おはやしの旋律づくりのポイントを明確にした後、以下のよう
に手順を確認した。

- ①旋律のリズムづくり
- ②つくったリズムに陽音階を当てはめる
- ③記譜

段階を追って活動することによって、無理なくおはやしの旋律づくりができるように配慮した。

おはやしの旋律のリズムづくりの様子

T: 自分のイメージに合う4小節のおはやしのリズムをつ
くります。どんなリズムにしようかよく考えて音符カ
ードを並べて下さい。音符カードは、1小節に4拍分
入るようになっています。小節からはみ出したり余っ
たりしたときは4拍分ではないということです。4拍
分がきちんと1小節に入っているか確認しながらつく
ってください(図2)。

〈停滞している児童に対しての支援〉

T: Sくんの季節のイメージは何?



図1 旋律づくりの四つのポイントの提示



図2 音符カードを用いたおはやしづくり

S：夏で、元気よく盛り上がるように演奏したい。
 T：盛り上がる感じを出すには、どんなリズムを使えばいいと思う？
 S：はねる感じ（机を叩いてはねる感じを表現する）。
 T：そうだね。はねる感じを出すのに、Sくんは付点を使っていたね。
 それから、「旋律づくりの四つのポイント」にもあるけど、終始音も考えた方がいいよね。
 S：終始音は…。終わる感じにしたいから、伸ばす音か、休符かあ。
 休符を使おう！

このように、児童は自分の思いや意図を基にして、試行錯誤を重ねながら季節のイメージに合うリズムをつくり上げることができた。音符カードを活用することによって、1小節に4拍分入っているかどうか一目瞭然で分かるので、音楽が苦手な児童も自信をもって取り組むことができた。また、おはやしの特徴的なリズムに二分音符を組み合わせたたり2小節単位で反復したりするなど、おはやしの「旋律づくりの四つのポイント」を参考にし、リズムづくりに取り組む様子が見られた。

つくったリズムに陽音階（レ・ミ・ソ・ラ・シ）を当てはめる様子

T：おはやしの旋律のリズムができたので、次はそのリズムに「レ・ミ・ソ・ラ・シ」の音を当てはめましょう。鍵盤ハーモニカで音を確認しながらつくって下さい。
 S：先生、見て。これでいい？
 T：Sくんのイメージはどんな感じなの？
 S：秋で、葉っぱが落ちるように優しい感じにしたい。
 T：葉っぱは、どんな風に落ちるの？
 S：こういう風に（手をヒラヒラさせて、高いところから低いところへゆっくり下ろしていく）。
 T：そうだね。そんな感じで葉っぱは落ちていくよね。
 じゃあ、音はどうしようか？
 S：音も高い音から低い音にしてみよう（図3）。
 T：Sくんの終始音は、どうなっているの？
 S：終わる感じにして、休符を使っている。
 T：じゃあ、最後の音は決まってくるね。
 S：そうだ。ミかうだ。
 ミがいいな。



図3 音符カードを用いたワークシート（部分）

児童は、葉っぱが落ちるイメージを体を使って表現することで、音に結び付けることができた。全ての児童が、自分がつくったリズムに鍵盤ハーモニカで確認しながら陽音階を当てはめ、4小節のおはやしの旋律を完成させることができた。「旋律のリズムづくり」と「つくったリズムに陽音階を当てはめる」活動に時間を要してしまい、記譜まではできない児童もいたが、早くできた児童が記譜を手伝ったりアドバイスをしたりするなど、協力して取り組む姿が見られた。児童は、「次の和太鼓のリズムづくりが楽しみだな」と、自分でつくったおはやしの旋律に和太鼓のリズムパートをつける実践2の活動を心待ちにしていた。

4 考察

- 児童が見通しをもって意欲的におはやしづくりができるように、年間を通して段階を追った題材構成の工夫をしたことは有効であった。
- 児童が音楽の要素を手掛かりにおはやしづくりに取り組めるように、「リズム」、「音階」、「終始音」、「反復」の「旋律づくりの四つのポイント」を明確に示したことは有効であった。
- 音符カードの活用は、1小節に4拍分が正確に入っているか視覚的に確認することができて有効であった。しかし、音符カードを並べることに集中してしまい、実際にリズムを叩きながら活動している児童は少なかった。今後は、机を叩いたり手拍子をしたりして実際に音を出し、自分のイメージに合っているか耳で確認してから音符カードを並べるようにすることが大切である。

実践2

1 題材名 「おはやしや民ように親しもう2」(第4学年・2学期)

2 本題材及び本時について

本題材は、おはやしの特徴を感じ取り、思いや意図をもって旋律に合うリズムパートをつくることができるようにするものである。本時は、全3時間計画の第2時にあたり、1学期につくったおはやしの旋律を基に、大太鼓と締太鼓の役割を生かしたり音楽の仕組みを考慮したりしながら、自分の思いや意図をもって4小節のリズムパートをつくるのがねらいとなる。自分の思いや意図を大太鼓のリズムパートに表すことができるように、本時の研究上の手だてを次のように構想し具体化した。

3 授業の実際

導入において、当番の児童が音符カードを並べそれを全員でリズム打ちしたり、ソーラン節を歌ったりすることによっておはやしのリズムパートづくりへの意欲を高めた。

次に、実践1でつくったおはやしの旋律を演奏し、旋律づくりで示した自分の思いを明確にした後で、以下の課題を提示した。

【課題】自分たちでつくったおはやしに和太鼓のリズムをつけよう

児童の季節のイメージ

- 〈春〉桜が咲くように豊かな感じ・春の暖かさ・生命の始まり→リズムはゆっくりめ、桜がポツと咲くように四分音符を使う。
そよ風のように伸ばす音を使う。
- 〈夏〉明るく・元気に・盛り上がるように→はねる音符を使って激しいリズムにする。おはやしの特徴的なリズムを使う。
- 〈秋〉葉っぱがひらひらと落ちるように優しく→風を表すような感じにするために、少しゆっくりめなリズムにする。
- 〈冬〉雪が優しく降っている感じに→長めの音符を使ってゆっくり演奏する。

実践1で児童がもったつくりたいおはやしのイメージと基本的には変わっていないが、授業実践を重ねるにつれて児童は自分の思いや意図がより明確になり、どのような大太鼓のリズムパートにしたのか具体的なイメージをもつことができた。

まず、児童が大太鼓のリズムパートづくりへの見通しがもてるように、秩父屋台ばやしを想起させ、和太鼓(大太鼓・締太鼓)の役割を以下のように確認した。

- ①大太鼓→「大波」、「小波」、「ドコン」、「つなぎ」などのメインの動き
- ②締太鼓→地のリズム

さらに、大太鼓のリズムパートづくりのヒントとなるように、「大波」、「小波」、「ドコン」、「つなぎ」のリズムを掲示し、リズムを手で叩いたり口唱歌したりして確認した。本授業では、締太鼓のリズムを学級で統一することによって、大太鼓のリズムパートづくりに重点的に取り組めるように配慮した。締太鼓のリズムは、季節を貫いて変わらないので、おはやし全体に統一感が生まれた。

大太鼓のリズムパートづくりにあたり、次の「リズムパートづくりの四つのポイント」を示した。

- ①終わり方(「続く感じ」・「終わる感じ」を旋律に合わせる)
- ②反復
- ③旋律や締太鼓との合わせ方
- ④イメージ確認

おはやしの「リズムパートづくりの四つのポイント」を明確にした後、児童は、自らがつくったおはやしの旋律(CD録音)に合わせて机を叩いたり手拍子をしたりしながら試行錯誤を重ね、自分のイメージに合う大太鼓のリズムパートをつくる活動に取り組んだ。

大太鼓のリズムパートをつくる様子

T：「リズムパートづくりの四つのポイント」に気を付けて、大太鼓のリズムをつくりましょう。

〈記譜ができない児童への支援〉

T：どんなリズムにしたいの？机を叩いてみて。

S：はい（考えた1小節のリズムを叩く）。

T：Sくんのおはやしの季節は冬だね。

冬のイメージは、どんな感じ？

S：ひっそり音頭で、ひっそりひっそり踊る感じ。

T：二分音符が入っていて、ゆっくりとひっそり

踊る感じが出ているよ。続きはどうする？

S：どうしようかなあ…。

T：四つのポイントのどれを使おうか？

S：（しばらく考えて）反復かなあ（図4）。

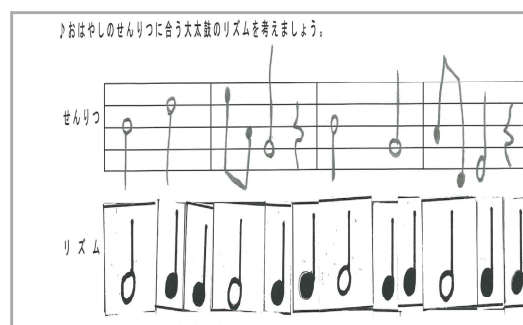


図4 音符カードを用いたワークシート（部分）

自分で考えることを苦手としている児童だが、1小節分を考えることができた。児童がつくった1小節を反復することによって4小節の大太鼓のリズムパートをつくることができた。二分音符と四分音符を用いたゆったりとしたリズムで、ひっそりとしたおはやしの旋律を際立たせることができた。

実践1の「旋律のリズムづくり」では、音符カードをただ並べているだけの児童も見られたが、実践2では、机を叩いたり手拍子をしたりしながらリズムを確認した後で音符カードを並べる児童が多数見られた。中には、つくった大太鼓のリズムパートに枠打ちをする部分を考えられた児童もいた。

リズムパートを客観的に見つめ直す様子

S1：先生、どうしても「ドコン」を入れたいけどいい？

T：いいよ。どこに入れようか？

S1：最後に入れようと思う。

T：じゃあ、CDに合わせて叩いてみて。

S1：S2くん、CDかけて。

S2：うん。わかった。

S1：（CDに合わせて演奏する。）

T：どうだった？

S1：いい感じ。やっぱり「ドコン」は最後に入れる。

S2：S1くんの「強くて勇ましくてカッコいい」というイメージに合っていて、いいと思うよ（図5）。

S3：「ドコン」の後には、四分休符が入っていて、終わる感じになっているね。



図5 季節ごとのグループでの学び合い

季節ごとのグループで、順番でCDを流したりリズムパートづくりへのアドバイスを رفتりするなど協力して取り組み、イメージに合うリズムパートをつくり上げることができた。児童は、「四つの季節をつなぐと、どんなおはやしになるのかな」と、実践3で学級オリジナルのおはやしを完成させることをとても楽しみにしている様子だった。

4 考察

- 自分の思いや意図を基に、どのような大太鼓のリズムパートにしたいのかより具体的なイメージをもたせるために、年間を通して段階を追った題材構成の工夫をしたことは有効であった。
- 実践2の「四つのポイント」を提示したことは、児童が音楽の要素や仕組みに着目し、机や手を叩くなど試行錯誤を重ねて自分のイメージに合うリズムをつくる上で有効であった。
- おはやしの旋律を邪魔しない大太鼓のリズムパートづくりができるように気付かせる場面があった方がよかった。例えば、「締太鼓のリズムと重なってしまうから、八分音符など細かい音符は使わない方がいい」、など旋律が際立つリズムを児童から引き出せるとよかった。